※ この通信は、これまでの号も含め、矢倉小学校ホームページでもお読みいただけます。

草津市立矢倉小学校通信　令和３年６月15日　NO.5

やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

やってみて、困らないと、わかることもわからない

この春、ろくろ木地師の北野清治さんの工房を訪ねることができた。工房は東近江市の蛭谷にある。蛭谷の集落は、その昔、全国各地で活躍する木地師を統括する地として栄えた。北野さんは、この地がかもし出す「場の力」と「伝統の技」を残していきたいと、木地作りから漆塗りまで全工程を手がける木工作家だ。

突然の訪問を快く受けてくださった北野さんに、作業場を案内してもらった。自分がどのようにろくろ挽きの技を身につけてきたのか、儲けるためというより、ほんものを使ってもらって、そのよさを知ってもらうために北野さんは心を砕いているとのこと。ろくろの伝統を絶やさないようにしたいという、このことだけを一心に願ってのことで今に至っているといった話である。話の終わりに、ろくろ挽きをさせてもらいたいとお願いしてみた。

「ケガだけはせんように…。では、今度、やってみましょうか。用意しておきます。都合がつく日をまた連絡してください。」

その日は、ちょうどコロナの緊急事態宣言が出される前だった。朝、一番から押しかけ、一通り終わったのが午後の３時だっただろうか、作業の合間にさまざまなお話を聞かせてもらえた。

「あとは、自分でやってみてください。ほんとうに困ったときに来るといいです。どうしようと困らないと、わかることもわからない。なんかおもしろそうなことないかなあだったら、まあ、それくらいのことです。それから、そのうち、痛い思いをすることもあるでしょう。私なんか、ここをケガしました。つい、油断したんです。」

「人間は、窮地に立たされないと、気合を入れてこのことが知りたい、これを学びたいというようになりません。趣味で、おもしろそうだから…くらいなら、その程度のもの。これをもとに生活していく、人生をかけるとなってはじめて、きっちりと仕事をしようと覚悟が決まり、腹が座る。ろくろを挽くというけれど、していることはケガをしないようにして、木をろくろカンナで削っているまでのこと。そこに、ものごとを見極め、時間をかけて、いいものを生み出そうと努力することが重なって、かたちになっていくもんです。プロとしての仕事と、趣味の仕事との違いはここにある、そう思います。ほんものを見抜くのもプロだからできる。カンナくずひとつとっても、ちがいがあります。この前も、ある方がやってきて、作業場を一通り見てまわり、足元のカンナくずを手にして言いました。『やっぱり、こうなりますもんね』と。ほら、これです。こんなに長くて、薄くて透き通っているでしょう。こうなると器の木目も鮮やかで、どの局面もきれいに仕上がる。見抜く人は見抜いているもんです。」

「ほんものはつづく。つづけるとほんものになる。」教育実践者、東井義男の言葉である。学ぶことの力強さとはこのようなものだとあらためて教えてもらえたひとときだった。

校長　大林道範